慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『過激派』考 : 新人会との関連において
Sub Title	
Author	酒井, 正文(Sakai, Masafumi)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集 : 慶應法学会政治学関係 (1983. 10) ,p.205- 228
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000005-0205

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『過激派』考

――新人会との関連において――

酒井正文

一　序
二　『過激派』の内容
三　刊行の背景
四　『過激派』の考察
五　結　語

一　序

本書『過激派』は、夥しいほどの著作物を発表してきた(1)新人会員が、同会結成後、始めて物した単行書であった。本書は、麻生久（筆名、麻山改介）、岡上守道（筆名、黒田礼二）(2)、佐野学（筆名、片島新）(3)の執筆にかかり、民友社版新時代叢書第一巻として、大正八年六月十八日に出版された(4)。同叢書の監修者は徳富猪一郎、編輯者は国民新聞社編輯部長石川六郎であった。本書は、「露国に勃興したボリシェヴィキ(5)」について記述することを目的としていた。ロシア革命とボリシェヴィキをわが国に紹介せんとした本書名『過激派』は、ボリシェヴィキをもって、〝過激派〟

と称して警戒した当時の慣用に従ったものであった。[6] 麻生久によれば、全国の新聞は挙げてボリシェヴィキを批判し、ロシアを嘲けるに亡国を以てし、悪罵と嘲笑とは至らざるなき有様であった、レーニンの宛字に「冷忍」と書く新聞もあった、[7]という。本書刊行一カ月前、大正八年五月、『中央公論』は「世界的大勢力たらんとする過激思想対応策」を特集した。これは、過激思想(ボリシェヴィズム)が誰れしも憎むべきものであるにもかかわらず流行となって世界的に拡がりつつある、わが国においても、その害毒にいかに対応するか備えておかねばならない、という趣旨から、諸家の論稿を編んだものであった。[8] 本書刊行一カ月後、大正八年七月には、『露西亜評論』が「過激派思想の我邦人に及ぼせる影響について」を特集し、過激思想に対するわが国言論界の敏感な警戒姿勢を表わした。[9] わが国情よりすれば影響少なしと見なすもの、逆に影響大なりと唱えるもの、革命後混乱の続くロシアの事態を静観せよと論じるものなど、諸家の主張は入り混ったが、過激思想のわが国への悪影響を排するという点では共通していた。本書は、このような〝過激派〟への警戒的風潮が見られるなかで刊行された。本書のパトロンというべき『国民新聞』が、本書を紹介する際、「転ばぬ前の杖」として世人に一読を強要したい、ロシアの惨禍に鑑み、日本の文化の進路をして過誤なからしめんため、また各自の戒慎のためとして推賞したのは、[10] 右の背景を受けてのことであった。

ボリシェヴィキによるロシア革命の情報は、新聞、雑誌等によって、勃発以来若干の日本人が伝えるもののほかは、[11] 主として連合諸国の電報を通して、混乱収まり切らぬ革命状況の変化に応じて報じられていたが、〝過激派〟の失脚説、レーニン死亡説等々大小取り混ぜた虚報、誤報の類も少なくなかった。大正八年六月、吉野作造は「過激思想の我国に於て著るしく(ママ)誤解せられて居ると云うよりも、寧ろ殆んど全く諒解されて居ない[12]」と記し、また同七月、三井物産社員としてロシアに駐在したことのあるロシア通今井政吉は、過激主義が、どれだけわが国の人々

に理解されて居るか疑問である、過激主義に対する概念は、未だ一般に洗練されて居らぬ[13]と述べている。堺利彦、山川均等の社会主義者は、十月革命後、『新社会』によって、レーニン政権の打ち出す施策を紹介しながら、革命の推移と性格を論じていたが、山川均によれば、実のところ初めてレーニンやトロツキーの思想の内容が一応把握できたのは、大正八年五月、近藤栄蔵が米国から持ち帰ったフレーナーの「プロレタリア革命とディクティタシップ」を読んでからであった[14]、という。このように、大正八年六月前後において、政治学者が、あるいはロシア通が、わが国では革命が殆んど全く諒解されていない、と現状を捉え、また社会主義者が理解不足を自認したごとく、わが国内のロシア革命に対する情報と理解は未だ不足していた。本書は、右のごとき状況と既述のごときボリシェヴィキへの警戒的風潮を背景にしながら、「単に冷静に過激派の思想そのものを記述し紹介する目的[15]」で刊行された。

本書『過激派』は、新人会機関誌において、〃過激派〃の真相を日本に伝える最初の且つ最良の著書として推賞された[16]。執筆者麻生久の所属する総同盟の機関誌『労働』は、「先ず現代の下では最大限度に於て、過激派を説いて居る[17]」と評し、『国民新聞』では、前出のごとく「転ばぬ前の杖」にと警世の書として推薦されたが、これらは身内の評価である。身内の評価を除外すると、当時本書を紹介や批評の対象としたものはほとんど見当らない。寡聞に属するが、本書刊行からおよそ一年に亙る、『改造』、『中央公論』、『太陽』、『日本及日本人』、『東京経済雑誌』、『東洋経済新報』、『ダイヤモンド』、『実業之世界』、『東方時論』、『我等』、『解放』、『東亜経済研究』等の雑誌、また刊行三ヵ月後までの『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『時事新報』の新聞において、紹介、批評の類は見られず、わずかに『日本労働年鑑』（大正九年版）の中で、「大正八年度出版社会問題関係主要著書[18]」一覧に加えられているに過ぎない。最近の新人会研究では、ヘンリー・スミスが本書を「ロシア革命の概要をはじめて日本に紹介した著作[19]」と記したが、本書は右のごとく刊行時期において、世の耳目を引いたわけではなかった。このような本書へ

の扱いは、戦後の文献評価においても同様であった。渡部義通、塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』は、本書に二カ月遅れた、堺利彦著『唯物史観の立場から』(三田書房　大正八年八月)所収の「ボリシェヴィキの建設的施設」[20]について、ロシアのボリシェヴィキが徒らに破壊を事とするものとして一般に取沙汰されているとき、いち早く正確な材料によって、労農政府が実施している、新社会の組織を略記した研究資料として、二十五頁に渡るその部分を紹介したが[21]、三〇八頁の本書には一言も言及していない。『日ソ関係図書総覧』[22]は、日本におけるロシア革命の研究・紹介書を網羅しているが、ここにおいても本書は欠落している。執筆者岡上守道が後年、本書を回想して「洵に恥づかしい、冷汗の出るような書物」[23]と称していたが、それにしても研究史上、本書の存在はあまりに顧みられることがなかった、といえよう。

本稿は、本書『過激派』に関して、その内容を紹介、検討し、また執筆の背景を究めつつ、新人会員の執筆にかかる本書刊行の意味を考察しようとするものである。

(1) 慶應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会編『東京帝大新人会研究ノート〈第一―四号〉』(同研究会　昭和五十四年十一月―昭和五十七年十一月)を参照されたい。

(2) ベンネーム黒田礼二は、クロポトキンとレーニンとを継ぎ合せたものであった(嘉治隆一「佐野学と其時代」〈『心』第六巻第八号　昭和二十八年八月〉四六頁)。

(3) ベンネーム片島新は、佐野学が月島の労働街に住んでいたので、新人会の新の字とくっつけて「月島新」という筆名にするつもりで書いたが、印刷所で間違えられて「片島」となったものをそのまま使ったものだという(前掲、嘉治「佐野学と其時代」)。

(4) 本書は、四六版、本文三〇八頁、一円六十銭、刊行後一カ年の内に品切れとなっている。宣伝文には「果然露国過激派は世界の脅威となれり、本書は則ち出版界の脅威」とある(新時代叢書『最近労働運動』〈大正九年六月刊〉所載広告文による)。

(5) 本書　緒言一頁。

(6) 右同　緒言三―四頁参照。なお、本書によれば、日本語の「過激派」は、英米の新聞用語 Radical Extremist または、Radicalist の直訳から来た、英米の新聞が一九一七年の三月革命(ママ)以後、勃興したボルシェヴィキを右のごとく呼称したことに由来するという(三―四頁)。

(7) 麻生久『黎明』（海口書店　昭和二十二年九月）四五頁。

(8) この特集には次のような論稿が掲載されていた。吉野作造「過激思想対策」、木村久一「過激思想とその対応策」、本間久雄「対応策の二方面」、三宅雪嶺「毛嫌ひ丈けでは不可」、室伏高信「過激主義とその対応策」、阿部次郎「過激思想対策」、赤木桁平「過激思想対応策」、播磨楢吉「先づボリシェヰキーの真相を知れ」。このうち吉野作造は「過激思想は近代産業組織の変革に伴ふプロレタリアートの発生と、資本家乃至支配階級の盲目的利己心との成り合いから生まれた私生児であって、国家組織の実質的に弱い所に特に著しく成長発達したものである。幸にして我国は国家組織の堅実鞏固なる事世界に其類がない。けれども近代産業革命の影響はまた著しいものがあるから、資本家乃至支配階級にして思を致す所なくんば、過激思想の幾分か拡まるのは到底之を避け難いだろう。事後に於て警察的取締りを厳重にするが如きは抑々末である。政府並びに資本家の覚醒に俟つは、事前に弊竇を予防するの唯一の途であろう。」と記し、過激思想への対応が、「民をして不平不満なからしむるにある」とした（五〇頁）。

(9) この特集には次のものが寄稿した。福田徳三「正しき理解を要す」、田中萃一郎「過激派思想は絶対に之を排斥せよ」、青木精一「社会生活の欠陥に依って」、煙山専太郎「雷同を誡めよ」、大庭柯公「過激主義と民主々義」、若宮卯之助「好奇心と取越苦労」、帆足理一郎「日本人は過激的国民に非ず」、茅原華山「混沌より混沌へ」、室伏高信「過激思想と日本」、今井政吉「油断のならぬ現象」、阿野次郎「現状打破の精神として」、八幡貞人「反対的方面と共鳴的方面」、石田三治「デモクラットでない人の中に」。

(10) 「『転ばぬ前の杖』として世人の一読を強要したい新時代叢書の『過激派』」（『国民新聞』　大正八年六月三十日　第三面）。

(11) 例えば、ジャーナリストでは、布施勝治、黒田乙吉、播磨楢吉等、実業人には正親町季董、夏秋亀一、今井政吉、文学者片上伸、外交官芦田均等が、革命の進行の実見録を著わしている（菊地昌典『ロシア革命と日本人』〈筑摩書房　昭和四十八年十二月〉参照のこと）。なお、ロシア革命研究の中で、比較的早く発表されたものには、占部百太郎「露国革命の根本思想」（『三田学会雑誌』第十二巻第二号　大正七年二月）、米田庄太郎「露国ニ於ケル革命運動ノ発達（一―四）」（『国民経済雑誌』第二十四巻第六号―第二十五巻第三号　大正七年六月―九月）がある。

(12) 前掲、吉野「過激思想対策」（四五頁）。

(13) 前掲、今井「油断のならぬ現象」（『露西亜評論』大正八年七月、但し引用は『復録版大正大雑誌』〈流動出版　昭和五十三年六月　一三九頁〉によった）。

(14) 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』（岩波書店　昭和三十六年十一月）三六九頁。

(15) 本書　緒言七頁。

(16) 「新人の書架」（『デモクラシイ』第五号　大正八月七月　二〇頁）。

(17) 「新刊紹介」（『労働』第九巻第十号　大正九年十月　一八頁）。

(18) 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑〈大正九年版〉』(同研究所　大正九年五月)　九四五頁。
(19) ヘンリー・スミス、松尾尊兌・森史子訳『新人会の研究』(東京大学出版会　昭和五十三年十二月)　三九頁。
(20) この論稿は、堺利彦が『新社会』(第五巻第六号　大正八年二月)に発表したものであった。
(21) 細川嘉六監修、渡部義通・塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』(大月書店　昭和三十三年二月)　一〇六頁。
(22) 「日ソ関係図書総覧」刊行委員会編『日ソ関係図書総覧』(岩崎学術出版社　昭和四十三年六月)。
(23) 岡上守道「ソヴェト生活の裏面を語る〈座談会〉」(『日本及日本人』第三四四号　昭和十二年一月　二六一頁)。

二　『過激派』の内容

本書『過激派』は第一編「過激派発達の歴史」、第二編「露国に於ける社会思想の歴史」、第三編「過激派思想と国家及社会」、第四編「過激派と芸術」から構成されている。麻生久、岡上守道、佐野学の執筆分担は全く明らかにされていない。著者は「絶対に批評又は議論を振廻すことを避け、単に冷静に過激派の思想そのものを記述し紹介する」[1]という研究的態度をもって執筆した、したがって露国過激派または露国大革命の通俗歴史を期待する者は失望するかもしれない[2]、と記している。

第一編「過激派発達の歴史」は、ロシア革命運動史における〝過激派〟の運動及びその思想を要領よく記述した。内容は、第一章「序論」、第二章「社会主義的思想の先駆」、第三章「社会主義政党の発生」、第四章「憲政運動と社会主義」、第五章「露国大革命と過激派との関係」、第六章「過激派内閣」、第七章「過激派主義の思想」、第八章「反過激派思潮」から構成されている。以下、第一編の示す革命運動の大要は次の如くである。十月革命の結果、労農露国の主役となったボリシェヴィキは、ロマノフ王朝に対する社会主義の過去の抵抗運動の延長線上に出現した。ロシア社会主義思想の先駆である虚無主義者、無政府主義者は、直接行動による反政府活動を行なったが、それは当局の取締りと民衆の反感をこうむる結果に終った。代って出現したのが社会主義政党であり、憲政運動を仮

面に、政治上の自由を獲得してのち、社会革命による専制体制の打倒を目ざしていた。マルクスに忠実なプレハーノフの率いる社会民主党、ロシア農民を中核に社会改造を企てるチェルノフ一派の社会革命党等が中心であったが、社会民主党は、「無資産者の専制主義」を旨とするレーニン一派の多数派（ボリシェヴィキ）と「無資産者の共和主義」をとるプレハーノフの多数派（メンシェヴィキ）に分裂した。[3] これらの社会主義勢力に社会革命の絶好の機会を提供したものが第一次大戦であった。大戦による国内混乱に乗じて二月革命が起り、ロマノフ王朝が崩壊、ケレンスキーによる臨時政府が成立すると、亡命中のレーニンはボリシェヴィキの指導者として帰国し、更なる革命をめざしてトロツキーとともに政府転覆に着手、十月革命において、軍隊を動員しての暴力的手段を用いて権力の奪取に成功し、「無資産者の専制主義」たる労農露国政府を樹立させ、自ら「ヂクタツーラ」をもって任じる立場に就いた。以上が本編に記されたロシア革命運動史の摘記である。

成立後の労農政府の組織については、本編は貧民独裁の専制主義として紹介、マルクス流の社会主義国家の実現をめざした主要政策を取り上げて解説したが、それらをエルフルトの社会主義綱領の露語直訳とも見るべきもの[4]と断定し、労農露国の憲法ともども、社会主義にとっては常套の標語にすぎないと論じた。このように本編は、労農政府の性格とその成立までの〝過激派〟の運動を検討した上で、過激派思想の特徴を次のように結論づけた。一、過激派思想は、マルクス主義である。二、彼等の思想は純然たる露西亜より来たものではなく、異民族的殊に猶太的思想である。三、政権を無資産階級の手に収めんとする点において、貧民独裁の専制主義である。四、彼等の理想の完成には、文明国無資産階級の一致提携をもとめる意味で、国際主義者[5]である。以上が本書第一編の内容であるが、それは全体の総論的位置を占めるものであった。

第二編「露国に於ける社会思想の歴史」は、革命の背景となったロシア社会思想を系統的に紹介した。本編は、

第一章「概論」、第二章「国粋主義」、第三章「西欧主義」、第四章「無政府主義」、第五章「社会主義」、第六章「過激派社会主義の勝利」から構成されている。ロシアの社会思想は、一八三〇年代ないし四〇年代から登場し、国粋主義（スラブ主義、ロシア主義）、西欧主義（自由主義、人道主義、人民主義、虚無主義）、社会主義（主観派、正統派、修正派）、無政府主義（科学派、宗教派）の四大系統に分類できるが該過激派の思想が、正統派社会主義に属するゆえに、本編の叙述は社会主義に重点を置くとしていた。以下に本編の紹介したロシア社会主義を摘記する。主観派社会主義[6]はロシア特有のものであるという。それはカントの影響を受け、社会の進歩は偉大なる個人の意識的活動による、革命は人民が自然に行なうべきものに非らずして、人類進化の方向を洞察する人々の努力があってはじめて可能となるとの立場をとる。ラヴロフ、ミハイロヴスキーがその代表であると記した。正統派社会主義は、マルクス主義であり近世社会主義の本統であるとして、「露国マルクス主義の父」プレハーノフ及びルヴォフの説を紹介した。プレハーノフに関しては、マルクス主義の忠実な代弁者として、そのマルクス主義理解を簡潔に記載した。修正派社会主義については、その哲学的基礎は尊敬に価するとして紹介したが、穏健なるこの立場は現下のロシアにおいて貢献甚だ少なしとの評を付け加えていた。

このような諸思想の流れを淡々と紹介した本編は、最後に「過激派社会主義の勝利」と題して、社会民主党中の多数派（ボリシェヴィキ）の紹介に力点を置いた。多数派は、急激なる社会革命の手段に依り、一挙に社会主義国家を実現せんとし、純粋に労働者階級を中心として、社会革命の際労働者の専制状態を現出させる、それ故に過激派と称すべきものだ、という。レーニン、トロツキーは「働かざるもの食うべからず」なる原則の下に、労働者以外の一切の階級を無視しつつあるとして、彼らの事蹟と性格とを紹介した。レーニンは、徹底的に、飽くまで非妥協的に、無政府階級の独裁政治を樹立し、以て社会主義国家の実現を期し、世界の無資産階級を糾合し、国際的社会

革命を行なわんとしている、トロツキーは、レーニンほどの学殖も冷静さもないが、煽動家として、革命実行家として、充分な熱情と機智と果断とをもち、時に甚だしく残忍に行動し、往々にして人の眼をそむけしむる、と表現され、労農露国においては、この二人を中心とする勢力によって正統派社会主義理論が実現されつつあると結論した。第二編は、ボリシェヴィキの思想的解明を重点に、その指導者にも言及するものであった。

第三編「過激派思想と国家及社会」は、二章から構成され、第一章において、国家に関する各種の学説思想を紹介しながら過激派の国家観を検討し、第二章において、露国過激派政府の憲法を殆んど逐条的に訳述した。第一章「過激派思想と国家」は、過激派思想が国家を肯定するか、否かを見極めるため、国家に関する思想、学説を紹介し、それを㈠在来国家の肯定、㈡在来国家の否定、㈢国家そのものの否定に大別し、それぞれ代表的思想家とその思想の大要を記した上で、過激派思想の国家観を闡明にさせた。すなわち、㈠過激派思想は無政府主義ではなく、国家そのものは否定しないこと、㈡過激派思想は在来の国家を全面的に否定し、それをもって一般人民を搾取するブルジョアの国家と見なすこと、㈢過激派が創設を目ざすものは、社会主義的国家であり、労働者をはじめとする真の人民の国家であることであった。本書はこのような労農露国の目ざす国家像が、その憲法に盛り込まれているとして条文を紹介し、「露西亜は労働者、兵卒、農民の代表者より成るソヴィエットの共和国」（第一条）であって「総ての中央及び地方の権力は、此のソヴィエットより出づる」（右同）、その国家の領土は、自由なる国民の自由なる連盟の基礎の上に建設せられたものであり、現在の侵略主義の上に建設された国家を否定し、民族それ自身の意志に基く民族自決主義の国家を建設する、と記した。

第二章「過激派と社会」は、労農露国の国家構造を明らかにすべく「露西亜社会主義連邦ソヴィエット共和国憲法」の大部分を逐条的に紹介した。一九一八年（大正七年）七月採択されたこの憲法は、全文九十条から構成された

が、当時のわが国でこれが一般に明らかにされたことはなかった。本書『過激派』は、このうちそのまま訳載したもの八十二カ条、条文の大意が紹介されたもの二カ条[7]、伏字となったもの一カ条[8]を掲げ、残り五カ条については取締当局を憚り、掲載から除外した[9]。本書は、今日の日本の国情に於ては、憲法を全文公にすることはむずかしいと断りながらも、その大要を次の構成で掲載している。一、新しい国家の基礎（労働、資本、教育の一般化、言論出版集会の自由、財政、兵役の意義及義務）、二、新しい国家の組織（国体及其領土、ソヴィエット政府の構成、選挙、国章及国旗）となっている。このような第三編における憲法条文の紹介は、ソヴィエット制によるボリシェヴィキの独裁政治が労農露国の国家構造の基礎にあることを伝えるものであった[10]。

第四編「過激派と芸術」は、ロシア文芸思潮と過激派との関係に言及し、ロシア文学の発達とその傾向とを唯物史観的に観察、ロシアの生産的社会関係を通じて、ロシアの文芸がどう決定され、帰趨したかを捉えようとした。社会組織が芸術思想をも決定するとの観点に立脚するものであった。以下略記する。元来ロシアは農業国であり、社会階級は貴族（地主）と奴隷（小作人）の関係で構成され、文学は貴族文学と農民文学であった。これらは田園芸術とも称されるものであったが、ロシアが農業本位から工業本位に移行し、近代都市が出現するにつれ都会人による都会芸術が発達、それは郷土的色彩が稀薄、没個性的、神秘的、性的頽廃、病理的にアブノーマル、厭世的となる。こうしてロシアには、何等かの方法において一切を破壊し、覆没し、復讐し、殲滅せずには気が済まないような気分が満ち亙った。つまり第一次大戦前のロシアには、破壊革命の思想、運動を受け入れ模倣するだけの充分な準備と資格があったという。このような破壊運動が芸術上に現われたものが、アナーキズムと結びついた未来派運動であり、それはロシア革命の前兆となった。しかしかかる芸術運動も、唯物論者であって精神文明を経済組織の従者とみなすレーニンの率いるボリシェヴィキが専制政治を確立すると、抑圧され、芸術家はトルストイ、プーシキン、

ツルゲネェフ等に至るまで蹂躙された。このことは、レーニンが人間の社会組織を革命し、貧富の差を平等にし、尠くとも各人に衣食を足らしめてのちに精神文明は確立せねばならぬ、労働者以外の寄食階級は殲滅しなければならぬと考えたことからくる、と記した。このように第四編は、過激派統治下のロシアにおいて、従来の芸術家が徹底的に迫害される運命にあるが、これは次なる社会を建設するためになされていると論じるものであった。

以上のごとく、本書の内容はロシア革命を、運動、思想、国家構造、指導者、芸術等に亙って広範囲に体系的に捉えようとした。

（1）本書　緒言七頁。
（2）右同　五頁。
（3）本書によれば、レーニンの「無資産者専制主義」は、党の「委員会制度を極端に強力なものとし、之が一切の権力を揮って、労働者を革命の前衛たらしめ、直に政府に向って戦闘を開始すべき」とするものであり、プレハーノフの「無資産者の共和主義」は、「中央委員会制度を以て、労働組合を円満に纏める為の重なる一機関とし、労働組合に経済的実力を与へ、之から議員でも何でも選挙の出来る様に、中央委員会をして一の産婆役たらしむべき」というものであった（三三―三四頁）。
（4）右同　一一一頁。エルフルト綱領の起草者カウツキーは、ロシア革命に関し、レーニン流の「無産者階級独裁」に反対した人物であり、レーニンはカウツキーを「背教者」と罵った関係にある。またエルフルト綱領は、建前にマルクス主義を打ち出しているが、実際の手段としては、改良的方法を考える立場もある（カール・カウツキー、三輪寿壮訳『エルフルト綱領解説』〈改造社　昭和五年九月〉参照）。したがって、労農露国政府の施政方針がエルフルト綱領の露語直訳ともみられるとの本書の表現は奇異といえよう。本書と同時期、大正八年五月、室伏高信はドイツ社会民主党とボルシェヴィキとの相違を指摘していた（「過激主義とその対応策」〈『中央公論』第三十四年第五号〉）。
（5）ただし、この解説部分は、八行に亙って伏字となっている（一〇九―一一〇頁）。
（6）この主観派社会主義という名辞は、一般的なものではない、露国特有のものであり、同様に思想も露国特有である、という（一六九頁）。
（7）憲法の条文中、条文の大意が紹介されたものは、第五条、第六条であった。ちなみに、第五条は「同一の目的を以て第三全露『サヴェート』会議は亜細亜、殖民地及一般小国の数億の労働者を奴隷化し、国民中の小数の使役者（資本家）の幸福を齎せる『ブルジョア』文明の野蛮政策を全滅せむことを主張す」であり、第六条は「本会議（第三全露会議）は芬蘭の独立軍隊の波斯撤退及『アルメニア』自決の自由を宣言せる、人民委員評議会会議の政策を称賛す」であった（上村進『労農露国革命憲法論』〈三宝閣　大正十四年五月〉参照）。

(8) 条文中伏字となったものは、第四十七条「人民委員及人民委員会附属の合議団は、人民委員評議会及全露中央執行委員会に対し、全責任を負う」であった（右同参照）。

(9) 著者が取締りを憚って掲載しなかった条文は以下のごとくであった。第四条「第三全露『サヴェート』会議は最も犯罪的なる現戦争に於て、地上に血河を流したる、資本主義及帝国主義の爪牙より、人生を解放せむとする鞏固なる決心を表示するを以て、秘密外交廃止、交戦軍中の労働者兵士間の最も広汎なる交驩の実行及自由なる民族自決を基礎とし、革命手段に訴へ無併合、無賠償の民主的平和を齎さむことを期す『サヴェート』政府の政策に同意す」。第二〇条「万国労働者の団結を期せんが為め露西亜に居住する外国人にして労働する者並に労働階級に属する者又は他人の労力を使役せざる農民に露国人と同等なる総ての権利を附与するを以て、地方『サヴェート』は何等困難なる手続を要せず、此等外国人に露国公民たる権利を与ふるの権能を認む」。第二十一条「露西亜社会主義連邦『サヴェート』共和国は政治、宗教的犯罪の為め追跡を受くる総ての外国人に避難するの権利を与ふ」。第二十二条「露西亜社会主義『サヴェート』共和国は人種民族の如何に拘はらず之に各種の権利を認むるを以て差別的基礎に依り或種の特権若くは優先権の許容並に小数民族の圧迫若くは同一権利の制限は共和基本法に違反するものなりと宣言す」。第二十三条「労働階級全般の利益を重んずるを以て露西亜社会主義連邦『サヴェート』共和国は社会革命に背反して権利を行使する個人及団体の権利を褫奪す」（右同参照）。

(10) 新人会が、労農露国のソヴェート制にふれ、国家構造に言及したのは、『同胞』に入ってからであった（「労農露西亜の国家的構造」〈第一号　大正九年十月〉）。

三　刊行の背景

本書『過激派』は前出のごとく、麻生久、岡上守道、佐野学の共同執筆であったが、これは麻生を中心に開かれていた木曜会[1]と称する研究会の成果でもあった。木曜会は、大正六年暮近くから、麻生の自宅で開かれ、山名義鶴、棚橋小虎、岸井寿郎等、麻生の三高時代の友人に、野坂参三と前出の岡上、佐野が参加した会合であった。岡上、佐野の参加以前の木曜会は、天下を談じ果てもなくロシアの革命を論じるにすぎないものであり、野坂を除いて社会主義の理論や研究を人前で発表できるような人物は少なかった。しかし、岡上が参加し、遅れて佐野が出席すると、俄然その研究熱は高まった[2]。本書は、この研究会の成果を世に問うものであった。

執筆者の一人麻生久は、大正六年七月東京帝大を卒業して東京日日新聞社に入社、その後友愛会に出入りして野坂参三とも親交を結んだ。麻生は、学生時代よりロシア文学を愛読し、ロシアの国土と国民性に深い憧憬の念を持ち、ロシア革命にも人に倍する関心を抱いていた。[3] 麻生がレーニンの十月革命後の大正七年一月、『東京日日新聞』紙上に著した「ピーターよりレーニンまで」[4]と題する論稿は、近代ロシアの建設者ピーター大帝以来のロシア史とレーニンの中に、ロシア民族に共通する国民性が表出しているとして、革命の性格を論じたものであった。麻生によれば、ロシアの革命家は純理的な理想を抱かずして一刻といえども生きて行くことができない、彼らの生活はこの理想の下に統括され、その熱烈なる霊的活力が彼らの生活の中に充満する、彼らは困難と障碍とを懸命に破壊して一直線に進み、理想に対する戦に生活を没入して自己を犠牲に供し、その理想を完全に実現するまでは暫時もその戦を休まないという。ここにいう実現さるべきロシアの理想とは、国家と称する城壁と野獣の如き物質的生存競争とを排し、崇高なる愛の精神に抱擁された合理的生活を築くことだった。しかしこの理想も長い革命運動の中では結実することなく、一九一七年の革命に至って、物質的人類生活における合理的解決として具現されたという。これは麻生が人類の進むべき方向に社会主義を意識して執筆したものであった。このように麻生は、ロシア革命を、ロシア革命家の伝統的気質に根ざした人類的革命であると評価した。[5] ボリシェヴィキによる革命は、ロシアの民族的伝統に根ざすが故に、レーニンもそれを継承し体現する人物との認識が生まれた。レーニンの革命哲学、革命の戦略戦術論を検討、評価した上での認識ではない。麻生の右述の見方は、革命後丸三年を経過した時点で著した論稿においても同様で、「レーニンは理想を異にするペテル」[6]であるとした。

岡上守道は、大正五年に東京帝大を卒業し、松岡均平を頼って満鉄の東亜経済調査局[7]に就職し、主としてユダヤ人問題とロシアの農村問題の研究に従事していた。[8] 岡上は、麻生の前出論稿「ピーターよりレーニンまで」が縁で

木曜会に参加した。麻生のレーニン観と岡上のそれとが一致したのだという。[9] 岡上は麻生に劣らずロシア好きであった。[10] 岡上はレーニンの中に、「偉大なロマンチスト」、「夢みる空想家」の姿を見出すだけでなく、その抱けるユートピアをも実行する傲岸不屈な意思の力と冷酷なる現実味を帯びた直径実践の態度を認めていた。調和の出来ぬような生活を平気でやってのけるのは、スラブ人の特徴であり、神の前に十字を切る生活と、悪魔と酒宴する生活とを、一日の内に幾回となく繰り返すような両極端な行動は、ロシア人レーニンにして可能なりという見方であった。[11] レーニンがロシアの民族的性格を体現しているとの解釈は、麻生のそれでもあった。[12] 岡上は、このようにロシア革命を歴史と伝統、民族性において捉える点で麻生と共通し、レーニンの人類的スケールの革命がロシアの民族的伝統である極端主義によって成就したとの認識において、麻生ともども過激派の行為を肯定的に受けとろうとした。同時期、過激派の革命をロシアの歴史において捉えようとする試みも見られないではないが、[13] 麻生、岡上のごとく、その歴史と民族的伝統に立って革命を肯定的に捉える立場は見られなかった。

佐野学は、大正六年東京帝大を卒業し、二年間大学院に入り農政学を専攻し、大正八年、前出東亜経済調査局に入り、[14] 同僚岡上の紹介で麻生のグループに参加した。[15] 佐野は大学院在学中、当時の情勢からロシアに興味を集中させ、ロシアの農村共同体ミール制度についてかなりぶ厚い報告書を出したことがあった。[16] 満鉄に入っては、サンジカリズム、アナーキズムの外国文献のほかレーニン、トロツキーのボリシェヴィズムものなどを手当り次第に翻訳したり、抜き書きを作っていた。[17] 佐野は、麻生、岡上のようにはロシア人の国民性から革命を捉える視点を表さなかったが、レーニンの革命を独りロシア民衆のためにする革命にあらずして国際的社会革命と意味づけた。[18] これは、レーニンの革命をもって「物質的人類生活における合理的解決」[19]と捉え、そこにロシア一国を超えた人類的意義を見出そうとした麻生、岡上の認識に連なるものであった。佐野は、この革命の完成の過程として用いられるドラス

ティックな手段を「已むを得ない」[20]と評したが、これは麻生、岡上と異なる意識ではない。麻生、岡上は、ロシア人の極端主義という民族的伝統がロシアの革命を人類的スケールで展開させていると見なしていたが、このことは、人類的意義の前には取られる極端な手段も已むなしの観を醸生させていく。両者は、世上非難攻撃の対象であった革命の過激行動を否定することはなかった。佐野と麻生、岡上とを結ぶ糸は、ここにも存した。かくて麻生は、岡上を得、佐野を手繰り寄せたが、三者にからまるものは、ロシア革命の肯定であり、認識における共通項であった。

麻生主宰の木曜会は、岡上、佐野の参加によって、研究的色彩をもつようになった。岡上、佐野が机を置いていた東亜経済調査局は、文献資料の宝庫であり、その収集範囲も広く、文献情報もいち早く入手できる極めて恵まれた状態にあった。エルツバッハやウェンカァなどの古い無政府主義研究の古典書の類が、以前からあったのはもちろん、社会民主党関係の文献、一九一七年の革命直前にベルンで出版されたレーニンの『国家と革命』でも、レーニン、トロツキーの共著『戦争と革命』でも、逸早く送り届けられていたという。[21]岡上、佐野は、当時の日本においては珍しいほどの環境のなかで、優れた語学の才を生かして研究し、その成果を木曜会にもたらした。とくに岡上が発表したロシア革命の最新情報と分析は、木曜会の出席者に深い印象を与えた。野坂参三は、岡上がロシア革命の原因、経過、労農政府の性格、革命の指導思想であったボリシェヴィズム、あるいはレーニン、トロツキーなどについて、詳細な報告をしたが話が実にたくみだったし、よく整理されていたので、非常によく理解することができた、おそらく革命成立後、わずか半年かそこらの時点で、ロシア革命についてのほぼ正確な理解をもつことができたのは、岡上のお蔭であろう、[22]と回顧している。岡上は、このように東亜経済調査局で把握した情報資料をもとに、ロシア革命に関する草稿を幾つか纏め、木曜会で提示した。麻生久『黎明』は、研究会における岡上の発表

として一部分を掲載したが、それによれば岡上は、ロシア革命が㈠、資本主義国の戦争の矛盾から生まれたこと、㈡、革命をささえる指導的思想がレーニンによって解釈されたマルクスの共産的社会主義であること、㈢、革命は指導者レーニンのごとき非妥協的な意思によってささえられていること、等を報告していた。[23] また木曜会での麻生は、主として十九世紀から今世紀初頭のロシア文芸思想を、革命に結びつけて報告し、佐野は「共産党宣言」を原書で数回にわたって講義した[24]という。本書は、このような木曜会での活動と、執筆者三名の革命への関心と思い入れが同時に結実したものであった。

(1) 麻生久らの研究会は、当時正式名称をもっていなかったといわれる（ヘンリー・スミス、松尾尊兌・森史子訳『新人会の研究』〈東京大学出版会　昭和五十三年十二月〉二五八頁）が、本稿においては便宜上、同会をもって木曜会と呼称することにする。同会を水曜会と称する文献（例えば、麻生久『黎明』〈新光社　大正十二年九月、海口書店　昭和二十二年九月〉、麻生久伝記刊行委員会編『麻生久伝』〈同委員会　昭和三十三年八月〉等）もあり、従来定まった名称が付せられていなかったが、前掲スミスの研究によれば、棚橋小虎の日記に記された同会の会合日は、木曜日が多かったという。このことから、本稿では木曜会の名称を使用することにした。

(2) 前掲、『麻生久伝』七三一七四頁参照。

(3) 麻生久のロシアへの憧憬は、麻生の自伝小説『濁流に泳ぐ』に描かれている。二月革命を報じる新聞を見入った麻生は、棚橋小虎、山名義鶴に対し、「おいゴーゴリとトロイカが露西亜の雪の野原を駈け出したぞ。今に世界の極てまで駈け通すだろう」と欣々として話しかけ、またレーニンの名前が新聞紙上に現われるようになると、毎朝新聞の来るのを待ち兼ねて食らいつくように電報欄を見て、露西亜革命の進行に読み耽り、レーニンの名を探した、という（麻生久『濁流に泳ぐ』〈海口書店　昭和二十一年十一月〉二七三―二七四頁参照）。

(4) 『東京日日新聞』に大正七年一月十二日から二十二日まで計六回連載した。

(5) 麻生久「人類解放の諸精神」（『解放』第一号　大正八年六月）においても同様の趣旨が論じられている。また、麻生は、シベリヤ出兵に反対して、「西伯利出兵問題」（『大学評論』第二巻第四号　大正七年四月）を執筆したが、ここでも過激派は「最も至難とする人類の理想を直截に実現せんとした」と記している。

(6) 「ペテルの理想は当時欧羅巴に勃興し来った国家主義の潮流に棹して露西亜を強大なる国家たらしむる事にあった。レーニンの理想は、今日尚は現代を左右しつゝある資本主義に反抗して人類生活の底を渦巻きつゝある社会主義の理想国を建設せむとするにあるのである。而して、其理想に対する態度の一直線にして極端なる点、其理想を実現せむとする手段の極端なる点に至つては両者の間何等異なる処はないので

ある」（「ボルシェヴィズムと露西亜の国民性」〈麻生久『労働運動者のひとり言』大鐙閣　大正十年四月〉二七四頁所収）。

（7）東亜経済調査局と新人会員との関わりについては、伊藤武雄『満鉄に生きて』（勁草書房　昭和三十九年九月）が参考になる。

（8）嘉治隆一『歴史を創る人々』（大八洲出版　昭和二十三年九月）一二四頁。

（9）前掲、麻生『黎明』（海口書店　昭和二十二年九月）一〇―二七頁参照。また前掲、『麻生久伝』七四頁。なお、大正七年春頃から岡上は麻生のグループに参加した。

（10）前掲、『麻生久伝』七七頁。

（11）前掲、麻生『黎明』二二頁。

（12）前掲、「ボルシェヴィズムと露西亜の国民性」参照。

（13）例えば、今井政吉「レーニンとトロツキ」（『太陽』第二十五巻第八号　大正八年六月十五日）は「過激主義も、思想その者に於てと云ふよりは寧ろ歴史的に、何等かの意味を有つて居ると見ることが出来やう」と結んでいる。

（14）「佐野学予審訊問調書」（『現代史資料〈第二〇巻〉』〈みすず書房　昭和四十三年六月〉一八七頁所収）によれば、佐野学は「大正八年夏頃東京ニ在ル南満洲鉄道株式会社東亜経済調査局ノ嘱託ト為リ」とあるが、実際上は、前掲『黎明』等の資料によれば、これより以前から身分は不明だが関わっていたことが推定できる。

（15）佐野の参加は、研究会の末期、大正八年正月であったという（前掲『麻生久伝』七八頁）。

（16）佐野学「私は何を読んだか」（『佐野学著作集〈第五巻〉』〈佐野学著作集刊行会　昭和三十三年六月〉八九五頁所収）。

（17）嘉治隆一「満鉄時代の佐野君」（『国民評論』第二一四号　昭和二十八年六月　三九頁）。

（18）高岡幹夫（佐野学）「プレスカウスカヤ女史」（『デモクラシイ』第四号　大正八年六月　一一頁）。

（19）前掲、麻生「ピーターよりレーニンまで」。

（20）前掲、高岡（佐野）「プレスカウスカヤ女史」。

（21）嘉治隆一「佐野学と其時代」（『心』第六巻第八号　昭和二十八年八月　五〇頁）。

（22）野坂参三『風雪のあゆみ〈第二巻〉』（新日本出版社　昭和五十年六月）一三一頁。

（23）前掲、麻生『黎明』五六―六二頁参照。

（24）前掲、野坂『風雪のあゆみ〈第二巻〉』一三二頁。

四　『過激派』の考察

本書『過激派』の考察には、その盛り込まれた内容から多様な視角が用意されるであろう。本稿においては、問題の視角を、執筆者に関すること、主題である過激思想の紹介、および特記すべき先駆的業績の三点に絞り、若干の考察を加えることにした。

本書は、前出のごとく総論もなく、序論もなく、結論もなく、唯だ編を四個に分け、麻生久、岡上守道、佐野学の三名が研究的態度をもってそれぞれ分担して筆をとったものという。[1] 麻生、岡上、佐野の執筆分担は全く示されていない。本書刊行時期までの三者の執筆量は少なく、また岡上、佐野のように勤務先での執筆が匿名でなされる[2]場合もあり、三者の執筆分担を当人執筆の他文献との比較検討によって特定ないしは推断することは極めて困難である。三者の後年の著作においても、明らかにされていない。しかしながら、各編各章中、若干の部分に関しては、当該執筆者を推断することも不可能ではない。第一編第五章「露国大革命と過激派との関係」中第二節「レーニン一派の帰国」は、岡上守道の執筆にかかわるものと推断される。第二節五三頁から五六頁が、麻生久『黎明』において、岡上の研究発表として記述された箇所と酷似しているからである。[3] すなわち五三頁一一行目「彼は本名をウラヂミル・イリウィッチ・ウリャーエフと言ふ。一八七〇年シンビルスクに生れた」から五六頁一一行目「露都に於て刊行されたる『プラーウダ』及び『プロスヴェスチェニエ』両誌の特別寄書家として、自家の主義を宣伝して居た」までが、該当部分である。このことから、第二節を含めた第一編第五章を、岡上の執筆と推断することも可能となる。第一編第七章「過激派主義の思想」に設けられた第一節「過激派と猶太人との関係」は、満鉄東亜経済調査局においてユダヤ人問題を一つの研究テーマとしていた[4]岡上との関係を伺わせる部分である。第一節は、一九

世紀末からの多数のユダヤ人労働者への迫害が、復讐心となって革命へのエネルギーに合流したとの趣旨を説くものであったが、これは岡上が本書刊行後、他に発表した論稿「露西亜革命の先駆者としての猶太人を論ず」において展開した、一九一七年の露西亜革命は猶太人の為に大成したとの論旨と共通していた。[5] したがって、第一編第一節をもって岡上の執筆とは推断いたしがたくも、これが岡上との関係の深さは伺うことができる。このように、第一編中、第五、七章は、執筆者に岡上を擬することが可能であった。しかし、これらの材料が直ちに第一編全部の岡上執筆説を証拠立てることにはならない。第一編中の他章の執筆者が依然特定ないし推断できない以上、第一編の執筆者は不明とせねばなるまい。麻生久の執筆分担は、第四編「過激派と芸術」についての可能性をもつが、これにも推断を許す材料がない。ただし、麻生が三者中ロシア文学に特に関心をもっていたこと、[6] 木曜会において、主として一九世紀から今世紀初頭の、ロシアの文芸思潮を、革命に結びつけて報告したとされることが、[7] 第四編麻生執筆の可能性を消しがたくする材料であることは確かである。佐野学の執筆分担については、特定も推断も困難な状況である。[8]

このように、本書からは麻生、岡上、佐野の執筆分担を特定できかねるが、三者を互いに結び、研究会を開かしめたロシア革命に関する共通の意識は、どのように本書に表出していただろうか。三者には、前出のごとくロシア革命を人類解放への第一歩と捉える共通項が存在した。第一編第一章は、ロシア革命をもって、まさにこれ乾坤一擲の世界的改造は、その第一頁を荒涼たる北欧の天地に展開したと記し、[9] 第二編第一章も、階級の争を終滅させることが、今世紀の辿るべき必至の過程であるとすれば、露国の社会革命は人類の文化史上に一新時期を画するものと著した。[10] 絶対に批評または議論を振り廻すことを避けるとしながらも、本書は執筆者たちの、革命が人類解放への一歩であるとの意識を浮き立たせ、他に見られたような革命への危険視を表さない。麻生、岡上には、既述のご

とくロシア革命がロシアの国民性に根ざすとの認識もあった。レーニンによる革命を、ロシア民族特有の、理想実現に向かって発揮される極端主義の性向を受け継ぐものと捉える立場である。本書は、レーニンを専制政治と専制政治の基礎たる資本家とに、残酷なる復讐を実行しようと期している熱狂漢[11]と描き出した。また、レーニンが自ら戦闘者の真先に立ち、民衆の力を一身に代表し、民衆を前衛軍として之を指揮、徹底的に、飽くまで非妥協的に、無資産階級の独裁政治を樹立し、以て社会主義国家の実現を期しつつあるとして[12]、本書にしてはことさらその極端性が強調された。こうした表現法には、麻生、岡上に見られた共通の認識の吐露を汲み取ることができる。この意味でも、本書は、木曜会の成果を投影させていた。

今日、ロシア革命、ロシア革命運動史、同思想史に関する研究は数多く発表され、特に大部の詳細精緻な研究書も刊行されている[13]。革命後、僅か一年半を経過した時点で刊行された本書を、右研究と比肩することはできない。しかし、過激派の思想を記述することを主題とする本書において、過激思想、すなわちレーニン主義の基本的立場が、今日いわれる視点に照らして[14]、如何に扱われているかを検証することは、妥当な考察と思われる。本書は、レーニン主義の基本的立場のうち、プロレタリア独裁論について、レーニンはマルクスを忠実に支持する正統派社会主義者であって、一挙に社会革命を実現し、無資産階級の独裁政治を楷梯とし、最も非妥協的に社会主義国家を展開せしめんとする[15]と記した。しかし、この無資産階級の独裁政治と一体化する前衛党組織論についての言及はない。革命のための労働者の組織化については、レーニン著『何をなすべきか』を引用しようとしたが、その箇所はほとんどが伏字となっている。「政府に反対して戦闘を開始するに最も便利なるは訓練ある労働者である[16]」以下四行が文字を伏せられた部分だが、本書はその箇所に続けて、レーニンが包蔵していた思想は、大革命において実現され、彼はその理想たる赤衛労働軍を手足のごとくに使って政権を簒奪した、と記している。しかし、こうして実

現した無資産者の独裁政治の根幹である前衛党の独裁とその党組織にまで筆は及ばない。労農同盟論、帝国主義論もレーニン主義の特徴であるが、本書では論じられない。本書刊行時期において、一般には過激思想すなわちレーニン主義を指して、「天下を労働者の完全な支配の下に置く」[17]ものとの表現が代表的であったが、これを考究し前衛党の独裁を論じたものは、寡聞ながら、見出せない。本書はレーニン主義を他と同様、その実相に亙って論究するものではなかった。この時期のわが国では、レーニン主義の理解は未だしといえた。佐野がレーニン主義の何たるかに目覚めたのは、大正十二年ロシアに亡命してからだという。[18]過激思想の本質を把握できないのは、本書のみの欠点ではなかった。

革命後、レーニン政権が打ち出す施策を本書は紹介した。一、土地国有令、二、銀行国有管理及貯蔵金徴発令、三、内外債の破棄、四、外国貿易の官業、五、産業統括と労働者の特権、の五個の施策を解説したが、これらの中にはすでに大正八年二月、『新社会』誌上に、堺利彦「ボリシェヰキの建設的施設」[19]として紹介されたものが含まれていた。本書も堺の右論稿を参照されたいと記している。レーニン政権の纏まった施策は『新社会』が先んじて提示し、また他においても断片的に紹介されていたが、[20]一九一八年七月制定の「露西亜社会主義連邦ソヴィエット共和国憲法」の全体像を示し、労農露国の国家構造と性格に言及したのは、本書独自の立場であった。大正八年九月、「露国ソ并エト政府の憲法」[21]と題して概要を解説したものはあったが、本書刊行時期まで新聞にも紹介されたことはない。管見の及ぶところ、わが国において右のソヴィエット共和国憲法が全文注釈付きで紹介、刊行されたのは、大正十二年であった[22]から、本書はこの点において先駆的業績を示すものであった。過激思想の紹介を主題とした本書も、その思想の把握は不十分であったが、右の点に関しては、他を圧した。

（1）本書　緒言六―七頁。

(2) 満鉄東亜経済調査局は『経済資料』を機関誌としていたが、これは特別の場合をのぞき匿名で執筆された。なお、岡上は、東亜経済調査局在勤中、ロシアに関し「露西亜製鉄業」(東亜経済調査局編『世界製鉄業』第四編　大正八年十一月)を執筆している。

(3) 麻生久『黎明』(海口書店　昭和二十二年九月)　二〇―二一頁。「レーニン其の本名は、ウラヂミル・イリウィッチ・ウリャーノフと云ふ。彼は一八七〇年シンビリスクに生れた。其祖先は猶太人であるとの評があるが実際はそうではないらしい。彼の父イリヤ・ニコライエウィッチは同地国民学校の校長をして居たと云はれる」(以上、二〇頁上段八―一二行)から「彼は瑞西亡命中にも露国の新聞『プラーウダ』に寄書し、又時々は『プライズヴェスチェニエ紙』に投書し、所謂レーニズムの宣伝に努めていたのである」(以上、二一頁上段七―九行)までが、該当箇所である。

(4) 嘉治隆一『歴史を創る人々』(大八洲出版　昭和二十三年九月)　一二四頁。

(5) 『解放』第一巻第三号　大正八年八月。なお、ユダヤ人とロシア革命を論じたものに、有川治助「露国革命と猶太人」(『外交時報』第三二三号　大正七年四月十五日)があるが、これはユダヤ人とロシア社会主義との密接な関係を解説したものだが、岡上のごとき結論は出していない。

(6) 麻生久伝記刊行委員会編『麻生久伝』(同委員会　昭和三十三年八月)二九―三〇、四一―四四頁参照。また麻生久『濁流に泳ぐ』(海口書店　昭和二十一年十一月)参照。

(7) 野坂参三『風雪のあゆみ〈第二巻〉』(新日本出版社　昭和五十年六月)　一三二頁。

(8) 佐野学は『デモクラシイ』に「無資産階級解放の道」(第一、二号　大正八年三、四月)を執筆しているが、それを検討しても、本書第二編第五章「社会主義」が佐野の執筆との推定も困難である。

(9) 本書　七頁。

(10) 右同　一一九―一二〇頁。

(11) 右同　三五頁。

(12) 右同　三五頁及び一九四頁。

(13) 例えば、E・H・カー、原田三郎・田中菊次・服部文男訳『ボリシェヴィキ革命(一)』(みすず書房　昭和四十二年十月)、右同、宇高基輔訳『ボリシェヴィキ革命(二)』(右同　昭和四十二年十二月、)、右同『ボリシェヴィキ革命(三)』(右同　昭和四十六年十二月)、江口朴郎編『ロシア革命の研究』(中央公論社　昭和四十三年十一月)、長尾久『ロシア十月革命の研究』(社会思想社　昭和四十八年三月)、勝田吉太郎『近代ロシヤ政治思想史』(創文社　昭和三十六年九月)等がある。

(14) レーニン主義については、猪木正道編『独裁の研究』(創文社　昭和三十二年四月)、関嘉彦『社会主義と自由』(民主社会主義研究会議　昭和五十四年一月)、木村健康編『社会思想読本』(東洋経済新報社　昭和三十三年三月)等を参照。

(15) 本書　一九〇頁。
(16) 右同　二六頁。
(17) 吉野作造「過激思想対策」（『中央公論』第三十四年第五号　大正八年五月　四五頁）。
(18) 「佐野学予審訊問調書」（『現代史資料〈第二〇巻〉』〈みすず書房　昭和四十三年六月〉所収　一八七頁）。
(19) 『新社会』第五巻第六号。
(20) 例えば『外交時報』は、「露国過激派の中産階級排斥」（第三一七号　大正七年一月十五日）、「露国労農政府の公債廃棄令及銀行国有令」（第三二一号　大正七年三月十五日）というように、かなり早くから労農露国の施策に関する情報を伝えている。
(21) 有川治助「露国ソヴエト政府の憲法(一)(二)」（『外交時報』第三五六、三五七号　大正八年九月一日、同十五日）。
(22) 上村進『労農露国革命憲法論』（三宝閣　大正十四年五月）参照。

五　結　語

新人会は、既述のごとく本書『過激派』をもって、ロシア革命の真相を日本に伝える最初の且つ最良の著書として推賞した。身内の評価として差し引いても、執筆内容にバランスをとり、簡にして要なる記述は、他に類書のえがたい当時のレベルとしては、推賞の対象であった。とりわけ、ロシア社会主義連邦ソヴィエット共和国憲法を紹介した本書の先駆的価値は特筆される。しかしながら、本書は一般に注目されたこともなかったし、身内の新人会に対してすら、その影響を認めることはむずかしい。新人会が労農露国に本格的に言及し、その国家を紹介しはじめたのは、大正九年十月であるから、本書刊行後、さらに一年半近く後のことになる。本書は歴史の泡影として消えていたのであった。

麻生久、岡上守道、佐野学の三名は、ロシア革命に人類解放の第一歩としての意義を見出していた。またロシアの国民性に引きつけられた二名の執筆者の思いは、少なからず本書の中から湧き出ていた。レーニン主義の理解は

浅薄なものであったが、他に見られたようなレーニン主義への危険視はない。本書は新人会初期会員のロシア観の一端をはからずも示す著作であった。

（一九八三年三月二十五日脱稿）

後記　本稿は一九七八年七月からはじめた「新人会研究会」の共同研究の成果でもある。研究会のメンバーは酒井の外、中村勝範（法学部教授）、内川正夫（幾徳工業大学講師）、吉田博司（八戸大学講師）、宗片邦子（慶應義塾大学院研究生）、玉井清（慶應義塾大学院生）、柏原昭弘（慶應義塾大学四年生）である。